

民国期の『詩経』研究

——胡適と古史辨派の場合——

横打 理奈

はじめに

『詩経』は民国以前において経学の対象であり、古代の人々の歌であるという認識に基づく解釈はされなかった。古代の人々の歌であるという認識に基づく新しい詩経研究が始まるのは、民国期になってからである。その背景には、五四新文学運動と古史辨を中心とした疑古派の古代史研究がある。

五四新文学運動は、口語文学の提唱に始まる文学思想全般の再認識運動と、儒教批判という新しい動きがあることが特徴である。疑古派による『古史辨』の諸研究も、古典に疑いのあるものは全て疑って読み直す、という当時としては大胆な試みに基づくことがその特徴である。

民国期の新しい古典解釈を究明する一端として、『詩経』がどのように研究されてきたのか、胡適の『詩経』への解釈と、古史辨派の『詩経』研究の態度を中心に概観したい。

一 民国における『詩経』研究の概観

(一) 日本における先行研究

元来、日本でも『詩経』は尊ばれてきた歴史がある。そのため、『詩経』研究は質量ともに優れたものが多い。近代以降、民国期の詩経研究を参照することも多くあるが、学術史的視点から民国期の詩経研究それ自体を研究の対象として論じているものは、管見の及ぶ限りその数は決して多くない。次に挙げる論文は、民国期の研究というよりも特に聞一多を中心に『詩経』を論じるものである。

中島みどり 「聞一多と詩経 —— 研究におけるその方法論的試み」

(女子大文学国文編四〇 一九八九)

牧角悦子 「聞一多の詩経研究 —— 創作と古典をむすぶもの——」

(二松學舎大学人文論叢六七 二〇〇二)

同 「想像の齒車 —— 聞一多の詩経研究——」

(詩経研究二六 二〇〇二)

同 「中国神話学の夜明け —— 近代中国の学術と顧頡剛・聞一多の古代学——」

(神話と詩二 二〇〇三)

鈴木義昭 「聞一多論文『詩経』的性欲観」について —— その淵源を尋ねて」

(早稲田大学日本語研究教育センター紀要一五 二〇〇二)

これらの論述は、これまで文学と古典研究を分けて論じられていた聞一多の功績を、二つを分断することなく一つの流れとして論じていることに意義があり、新たな『詩経』研究といえる。しかしながら、聞一多の『詩経』学という視点からの論考であり、民国期全般の『詩経』研究を述べたものではない。

一方、古史辨派に対する研究は、日本では決して多くない。また古史辨グループの事実上の中心である顧頡剛自体の研究も多くない。

(二) 中国・台湾における先行研究

一方、中国・台湾では事情が日本とは全くといってよいほど異なる。それは民国期の研究が、中国・台湾の研究者自身の学統に直接連なるものだからであろう。また、実際には自身の研究を民国期の研究の延長線上で捉えている研究もある。中国・台湾における『詩経』研究は膨大な量があり、また長い歴史がある。そのような状況の中で、民国期の『詩経』研究について触れているものは少なくない。今回はその中で胡適・郭沫若・顧頡剛に関する論文の中で管見したものの一部を紹介する。

(中国)

胡義成 「胡適与詩経」(江西師院学報・一九八二年一期)

「郭沫若与詩経」(西南師院学報・一九八二年二期)

「魯迅与詩経」(復印報刊資料「中国古代・近代文学研究」一九八一年十九期)

張啓成 『詩経』研究概況」(復印報刊資料「中国古代・近代文学研究」一九八五年十五期)

夏傳才 『詩経研究史概要』萬卷樓圖書・一九九三

張啓成は、近代の研究で最も著名なのが王国維であり、現代の研究で突出したのが聞一多と郭沫若である、と言及

している。

夏傳才の上記著書には、民国期の研究として魯迅・胡適および古史辨派・郭沫若・聞一多について言及している。⁽¹⁾

(台湾)

張学波「六十年来之詩学」(『六十年来之国学』第一冊)一九七二 台北・正中書局

中国入学者における胡適評価は厳しいものがある。それは胡適が台湾へ渡ったという事実が、彼の研究評価に影響を与えているからであろう。言うまでもないことだが、研究を取り巻く政治環境に左右された評価には注意が必要である。しかし、最近では胡適の政治性を除いた研究面・思想面において再評価の動きがあることに期待したい。

また古史辨派の研究は少ないが、その中で林慶彰「顧頡剛論詩序」(西口智也訳)では、「詩序」と『詩経』の関係を論じている。林慶彰によれば、「民国初期から抗戦までの期間、『詩序』について討論した文章が突如として多くなつた」⁽²⁾と指摘する。『古史辨』における『詩経』研究の一端を指摘していることは重要である。

二 民国期の詩経研究者たち

民国期における『詩経』研究者は決して少なくない。次にあげる王国維・郭沫若・聞一多・顧頡剛・胡適などにその成果がある。

王国維(一八七七一—一九二七)は、はじめカントやショーペンハウアー、ニーチェなどのドイツ観念論哲学を学ん

だ後、文学へ傾倒し、中国古典戯曲を研究した。一九一五年の『宋元戯曲史』は、これまで正統文学の主流とされてこなかった戯曲の分野で、はじめて基礎および系統立てての研究を行ったという点で、中国文学研究に新たな局面を開いたとされる。辛亥革命と同時に日本に亡命、京都では中国古代史研究に没頭し、甲骨文・金文の解説や敦煌写本を整理研究した成果は、一九一七年の「殷周制度論」に結びついた。この甲骨文・金文の解説という点から、『詩経』の新たな解釈に挑んでいる。

郭沫若（一八九二—一九七八）は、一九二二年に発表した口語自由詩集『女神』により、口語自由詩の旗手として文壇に登場した。しかし、そうした創作活動の一方で早くから學術研究にも携わってきた。郭沫若の研究は文学から歴史まで多岐にわたっているが、『中国古代社会研究』（一九三〇）・『十批判書』・『青銅時代』（一九四五）・『奴隸制時代』（一九五二）などの古代史研究の中で『詩経』をしばしば取り上げている。しかし郭沫若の『詩経』に関する最初の成果は、『詩経』国風篇から四十篇を選択し口語訳した『卷耳集』であった。『卷耳集』は一九二三年に出版されたが、その翻訳作業は一九二二年に行っており、ちょうど郭沫若の口語自由詩創作の時期と重なっている。郭沫若創作時期の最初期に、『女神』『星空』（一九二三）という口語自由詩制作と並行して、『詩経』口語訳を行っていたという事実は、今後の郭沫若の文学研究の中でも大きく論じられてよいだろう。また『卷耳集』以外の研究書については、郭沫若の古代研究としてこれまでも大いに論じられてきた。

聞一多（一八九九—一九四六）は基礎作業としての文献学と訓詁学の上に、新たに西洋の学問である、神話学・文化人類学・社会学などといった学問、更に中国で起こった古文字学などを取り入れ、中国古典を研究するという試みを行った。特に『詩経』については、古代民俗学や金文の研究から推測し、字義の新しい解釈を行った。最も早い『詩経』への言及は「詩経的性欲観」（一九二七）であり、「詩経新義」「詩経通義」（一九三七）などがある。また、長年

読み間違われていた「鴻」字の読みを解き明かした「詩新台鴻字説」（一九三五・「精華学報」第一〇卷第三期）も大きな成果である。郝風「新臺」の「魚網を之れ設けし、鴻則ち之に離る」の「鴻」字の解釈を、それが二千年来「鴻鵠」であるとされてきたものを「蝦蟇」であると検証したものである。「鴻」字を鴻鵠で訳すると、この鳥は美しい鳥であるため、詩の意味が通らない。さらには魚をとる網に鳥がかかることも不可解である。聞一多の説の通り、蝦蟇であるとする意味は大変わかりやすくなる。しかし、これは聞一多が発表するまでは誰も考えつかなかった。郭沫若はこの論に基づいて一九二三年に発表した『卷耳集』での解釈を後に改めた。このこと一つをとってみても聞一多が『詩経』学に与えた影響が多であることが分かる。

三 『古史辨』の『詩経』研究の概要

『古史辨』は、疑古という立場で顧頡剛（一八九三—一九八〇）を中心に羅根澤・呂思勉たちが編著した、全七冊に及ぶ論集である。第一冊には顧頡剛の長文の自序があり、その中には胡適から学んだ『詩経』のことが記されている。『詩経』についての論文は『古史辨』第三冊下篇にまとめられている。

顧頡剛は詩経研究への決意を自序の中で以下のように著している。

『詩辨妄』を収録したことから、宋より後の人の經典解釈を読み、漢代の儒者の欠点も少なからずわかりだした。ひきつづいて、漢代の儒者の詩説と『詩経』の本文を読んだ。この時になって漢儒の詩説を読み返すと、当然、至る所で彼らの誤りに気がついて、私はいっそう大胆な抹殺をやったのけた。この時になって『詩経』の本

文を読み返すと、やはり数年来の歌謡のなかから得ていた見解を勇敢に応用して、比較研究をするのであった。ほんとうに大胆なことであった。漢学と宋学とを一緒に覆して、それらの真相を赤裸々に見い出そうとしたのである。⁽³⁾

(中略)

半年あまりも『詩経』に苦勞したので、昔の人の作った経解は実に見識なめちやくちや極まるものであり、現在ではもう絶対にこのやからの経学上の偶像に地位と權威とを占めさせておいてはならないことを明確に知った。そこで、私は発奮してでたらめな経説を清掃しようとした。この数年来、『詩経』の注釈の方面において幾篇かの批評をものし、『詩経』の真相の方面にも若干の原則を提出した。すべて本書「古史辨」の第二「三」冊に集めてある。⁽⁴⁾

『古史辨』は一九二六年に刊行され、第七冊まで発行された。疑古派の研究成果はそのまま直接今の研究につながるものもある。しかし、思想界や研究界の新旧の知識人たちが巻き込んで行われた議論だけに、興味深い議論といえる。では、『古史辨』第三冊下編では、『詩経』についてどのようなことが論点とされているのか。

『古史辨』第三冊下編に収録されている『詩経』に関する論文は五十一編である。その最初の論文、顧頡剛「詩経在春秋戰國間地位」では、『詩経』が如何に経学によって詩の真意が損なわれ、付会されたかを述べている。

『詩経』は文学書である。このことは現在の人からすれば、当然ながら認めない人はいない。我々は既に『詩経』が文学書の一つであると知っており、当然文学の目線ですそれを批評せねばならず、文学書の慣例として注釈をつ

けている、このことは正論である。しかし我々が『詩経』は文学書の一つである」ということは容易であるが、実際に批評・注釈をすることは実に難しい。どうしてだろうか。二千年来『詩経』学者がでたらめにしてしまったからであり、その真相は嘘で塗り固められていた。(5)

この論文が書かれたのが一九二二(民国一一)年である。既にこの時期にはここで顧頡剛の言及するように『詩経』が経書ではなく文学書である、という認識がある。

ちなみに、『古史辨』第三冊下編は『詩経』に関する論文を集めたものである。その巻頭論文は上述のように顧頡剛の「詩経在春秋戰國間地位」である。書かれた年次からいうと、胡適の「詩三百篇字解」が早い。胡適のこの論は、一連の論戦の火付け役にはならなかったのだが、しかし顧頡剛は、新しい『詩経』学の流れのなかにおいて、はずせない一本として胡適のこの論を三冊下編に収録した。

『古史辨』第三冊は上編に『周易』、下編に『詩経』に関係する論文を収録している。この第三冊の自序で顧頡剛は、

この第三冊『古史辨』は上下の二編に分けた。上編は『周易』を討論し、下編は『詩経』を論じたもので、多数がこの十年來の作品であり、近年の人々の『周易』『詩経』の二冊に対する態度を見ることが出来る。(中略) この第三冊の重要な意義は、漢代の人の経学の説を打破することである。(6)

と、『詩経』の経学的解釈への挑戦を名言している。

『古史辨』における『詩経』の研究態度は、『詩経』自体の解釈、「詩序」の付会説についての論議、『詩経』個別作品の解釈、に大きく分けられる。ここではその論を個別に検討しないが、この研究態度は『詩経』以外の古典にもあてはまる『古史辨』全般に共通する態度であり、民国知識人の經学に対する共通の態度であったといえる。⁽⁷⁾

四 胡適の『詩経』研究の概要 — 『詩経』に言及した著書

胡適（一八九一—一九六二）は、五四文学革命初期の口語文学の提唱者として論じられることが多い。しかしここでは古典研究、特に『詩経』に対する研究という観点から述べてみたい。一九一七年に『新青年』に掲載された「文学改良芻議」には、『詩経』について言及があるが、実は胡適はそれ以前から『詩経』に関する研究は行っていた。実際、顧頡剛に詩経研究を行わせるきっかけになったのは胡適であった。顧頡剛は『古史辨』自序で、胡適との出会いを以下のように述べている。

二年目（一九一七年）は、新たに胡適先生（このとき二十七歳）を招聘した。「あの人は米国から帰国したばかりの留学生である。北京大学へ来て中国のことを講義できるだろうか。」多くの級友たちはみなこのような疑いを持った。私もやはり御多分に洩れなかった。彼はやって来た。それまでの授業にはおかまいなしに、プリントを編集しなおした。關頭第一章は「中国哲学受胎時代」で、『詩経』を用いて時代の説明をし、唐・虞・夏・商を抛っておいて、ただちに周の宣王（西紀前八二七—七二八在位）以後から説きだした。この革新は、われわれ仲間の三皇五帝でいっぱいになっている頭に、俄然、極めて大きな打撃を与え、滿堂のものを舌がま

き上つて下りぬほどに驚かした。(中略)私は数回の講義を聴いて、一つの道理が呑みこめたので、級友に、「あの人は陳漢章先生ほどにたくさんの書物を読んではいないが、論断の点では一家を立てられる人である」と語った。(中略)それ以後、私たちは胡適先生に非常に信服した。上古史は信頼できないという私の観念は、『改訂考』を読んだ後に再びこのようにして温められたのである。⁽⁸⁾

顧頡剛に疑史という概念を植えたのは、北京大学に招聘されたばかりの胡適であったのだが、その胡適は『詩経』に対してどのような研究態度を持っていたのか。胡適が『詩経』に言及しているものは少なくない。以下にそれを挙げる。

○「詩三百篇言字解」(一九一〇)

『詩経』の中に現われる「言」の字の解釈について論じている。『詩経』研究の先駆けであり、『古史辨』第三冊に収録された、民国期の『詩経』研究の中でも最も初期の研究である。胡適の挙げた「言」の要点は以下の通りである。

- (一)、「言」字は接続詞の一種で、連字ともいい、その用法は「而」字に似ている。(二)、「言」字は「乃」の意味にも使う。(三)、「言」字は代名詞の「之」字に作るときもある。⁽⁹⁾

この論については、その後『古史辨』では特に反応がなかった。しかし、一九一〇年という民国前年の早い時期に、また「文学改良芻議」などの一連の『詩経』発言の前に、『詩経』に取り組んでいたということは、すでに胡適にとつて、『詩経』が経学の対象ではなく文学であったということを示す重要な見解であり、この訓詁(字句解釈)という

観点は後の「談談『詩経』」（一九二五）へと繋がる態度である。

○「文学改良芻議」（「新青年」一九一七）

『詩経』は内容に踏み込んだ作品であるとし、内容のある作品の必要性を『詩経』に見出している。この考え方は、翌年の「建設的文学革命論」（新青年・一九一八）では、文学の伝統という問題において、『詩経』とは明言しないが、それが中国文学の正統性の関連で深められる。

○「談新詩」（一九一九）

文学史上における詩の進化過程の出発点として『詩経』を位置づける。この論は、『詩経』につながる詩こそが文学の正統であるという主張へつながる。

もし歴史的進化的視点から中国の詩の変遷を観察するならば、「三百篇」以来今日に至るまで、詩の進化は未だ嘗て詩体の進化を伴わなかったことはない。「三百篇」の中にも「氓之蚩蚩」「七月流火」のような、幾篇かのすぐれた詩があり、また「坎坎伐檀兮」「園有桃」のような幾篇かの巧妙な長短句があるけれども、要するに「三百篇」は、まだ「風謠体」の簡単な枠組みを脱しきれないものである。続いて南方の騷賦文学が発生するに及んで、初めて偉大な長編の韻文が現れた。これが第一次の解放である。しかし騷賦体には「兮」や「些」というような結尾の字があつて、停頓が余りにも多すぎるし余りにも長すぎるし、余りにも不自然であつた。それ故漢以後の五七言の古詩になると、これらの無意味な結尾の漢字を削ってしまったら、前編貫通したものに変わり、一層自然になった。（中略）これが第二次の解放である。五七言が正宗の詩体となつてから以後、最大の解放は詩が変じて詞となつたことである。五七言詩は言語の自然に合致しない。我々の談話は決してその一句一句が五字或

いは七字でありえない。詩が詞に変じたのは、つまり形の整った句法から変じて比較的自然的な長短入り混じった句法になったことである。(中略)これが第三次の解放である。⁽¹⁰⁾

「建設的文学革命論」では『詩経』とは明言されなかったが、ここに来て『詩経』は口語自由詩の系譜の祖である、と論じたのである。口語自由詩が、文学の正統であることを表明した意義は大きい。

○「談談『詩経』」(時事新報・学灯一九二五 後『古史辨』第三冊収録)

①『詩経』は經典ではない。②孔子は『詩経』を編集していない。③『詩経』はある時代に編集されたものではない。④『詩経』の解釈は、漢代に至って經典になってしまった。」とした上で、

『詩経』の研究は進んでいるとはいえ、しかしそれは徹底しておらず、大体はこちらをひっくり返してこちらにこじつけ、あちらをひっくり返してこちらにこじつけたものである。私は『詩経』の研究に徹底的な改革が必要だと考えるが、おそらくそれは私たちの仕事であろう。我々は新しい視点、よい方法、多くの材料を用いて大膽かつ細心な研究をすべきであり、我々の研究効果が先人よりも十分であることを信じている。これが、我々が取るべき態度であり、我々が尽くすべき責任である。⁽¹¹⁾

と述べ、その上で、訓詁(字句解釈)と解題(内容紹介)に従って『詩経』を研究すべきとする。しかし、この訓詁は従来の訓詁とは異なり、「注意を払い、精密な科学的方法を用いて、新しい訓詁を検討し、『詩経』の文字と文法上に対して新しい注釈を加える」ものであるとした。そして、

総じて言えば『詩経』の文字と文法を理解したければ、帰納と比較の方法を用いなければならない。三百篇中の一首ごとの意向を理解したければ、毛伝や鄭箋や朱注など全部抛つて、己で詳細に原文を読まなければならない。しかし必ず参考比較できる材料を多く備え、民俗学・社会学・文学・史学を多く研究しなければならない。⁽¹²⁾

とし、西洋の近代学術の観点から『詩経』を読み解く必要があることを主張したのである。

○前掲『白話文学史』(一九二八)

胡適が構想していた目次は以下のものである。

一 引論

二 二千年前の白話文学——國風

三 春秋戰國時代の文学是白話的嗎

四 漢魏六朝の民間文学 (1) 古文学的死期 (2) 漢代的民間文学 (3) 三國六朝の平民文学

五 唐代文学白話化 (1) 初唐到盛唐 (2) 中唐的詩 (3) 中唐的古文與白話散文 (4) 晚唐的詩與白

話散文 (5) 晚唐五代的詞

六 兩宋的白話文学 (1) 宋初的文学論 (2) 北宋詩 (3) 南宋的白話詩 (4) 北宋的白話詞 (5)

南宋的白話詞 (6) 白話語錄 (7) 白話小説

七 金元的白話文学 (1) 總論 (2) 曲一 小令 (3) 曲二 弦索套數 (4) 曲三 戲劇 (5) 小説

八 明代的白話文学 (1) 文学的復古 (2) 白話小説的成人時期

- 九 清代的白話文學 (1) 古文學的末路 (2) 小説上 清室盛時 (3) 小説下 清室末年
 十 國語文學的運動

この白話文學史の全容が明らかになることはなかった。しかしこの構想から見ただけでも、文學史を『詩經』に始まり「國語文學運動」で終了させている点から、明らかに胡適が自身の文學活動と『詩經』を結び付けていたことが分かるのである。

5. まとめ

清朝以前の学問は古典研究であったが、それは個人的な道の探求を最終目的とするものであった。これに対し、民国に入ると中国においてはじめて近代的な学術が起こった。清朝考証学の有効性を認めた上で、西洋の学問を汲み取った新たな研究態度としてそれは開花したのである。

『詩經』は五經の一つであり、五四新文學運動で打ち倒されるべき「權威」の一つであった。しかし実際には胡適は『詩經』を口語文學の祖として位置づけることで、その儒教的權威を利用しつつ、中国の口語文學という新たな伝統を創造せんとした。胡適は『詩經』が口語文學の祖であるばかりでなく、また男女の戀愛を多く歌ったものであることを強調して、当時の社会的風潮であった男女の自由戀愛の正当化の補強教材ともした。いわば、儒教の古典から、「中国」への古典への価値の転換を行ったといえよう。『詩經』を經学という枠から外し、文學史の起点としておいたこの視点は斬新であり、その後、古典文學を学ぶ者たちを、經学という枷から解放したことは大きな貢献であった。顧頡剛に代表される古史辨派の人々もまた、古代史の再構築という形で次々とこれまでの經学に立ち向かった姿勢は、

それまで儒教的な歴史観からの古典解釈という立場を揺るがした。

民国期の知識人たちは、新しい時代の中で新しい方法によって『詩経』の研究に取り組んだ。胡適が切り開いたその道は、その後の郭沫若や聞一多たち文学者の『詩経』研究として、また顧頡剛に代表される歴史研究として展開されたのであった。

注

- (1) 夏傳才『詩経研究史概要』（萬卷樓圖書・一九九三年七月初版）には、近代における『詩経』学に貢献した人物として、魯迅・胡適及び古史辨派・郭沫若・聞一多を論立している。以下はその章題である。

魯迅論《詩経》／胡適和古史辨派對《詩経》的研究／郭沫若對《詩経》研究的貢獻／聞一多——現代《詩経》研究大師

- (2) 林慶彰「顧頡剛論詩序」（訳：西口智也）『村山吉宏廣教授古希記念中国古典学論集』汲古書院・平成十二年）の原注によれば、林慶彰主編『経学研究論著目録（一九二二—一九八七）』（台北・漢学研究中心・一九八九年十二月・上冊・二九六頁）の「詩序」の編目参照とある。漢学研究中心のWeb上 (<http://ccs.ncl.edu.tw/data.html>) で検索を行うと、二四六件の「詩序」に関する論文がある。その中には、傅斯年や鄭振鐸といった名前も見える。

林論文では、特に「詩序」作者の問題と、「詩序」解釈の観点からの問題と二つ挙げているが、『詩序』に対する徹底的な批判により、『詩序』の詩旨解釈は不合理であるとみなしている。彼らのこうした『詩序』に対する徹底的な批判により、『詩序』と孔門の間に必然的な関係がないことが証明されることとなった。」（同九六三

頁) というように、「詩序」と『詩經』の関係から、新たな『詩經』研究が行われたことを述べる。

(3) 『ある歴史家の生い立ち』(顧頡剛・平岡武夫訳・岩波書店・一九八七) 九五頁。

(4) 前掲書、九八〜九九頁

(5) 詩經是一部文學書，這句話對現在人說，自然是沒有一個不承認的。我們既知道牠是一部文學書，就應該用文學的眼光去批評牠。用文學書的慣例去注釋牠，才是正辦。不過我們要說「詩經是一部文學書」一句話很容易，而要實做批評和注釋的事卻難之又難。這為什麼？因為二千年來的詩學專家鬧得太不成樣子了，牠的真相全給這一輩人弄糊塗了。(顧頡剛「詩經在春秋戰國間的地位」)

(6) 這第三册古史辨分為上下兩編：上編是討論周易，下編是討論詩三百篇的；多數是這十年來的作品，可以見出近年的人們對於這二書的態度。(中略) 這一册書的根本意義，是打破漢人的經說。(顧頡剛「古史辨」第三册自序)

(7) 顧頡剛「詩經在春秋戰國間的地位」は卷頭論文ということもあり、『詩經』読解あるいは研究態度を表明した論文である。また、鄭振鐸「讀毛詩序」は『詩經』研究における「詩序」のあり方・弊害を論じたものである。「野有死麋」「邶風靜女」などの緒篇の読解については顧頡剛・俞平伯・胡適・周作人・劉大白・劉復など多数の論者の議論が掲載されている。

(8) 注(4)、七一〜七二頁。

(9) (一) 言字是一種契合詞，又名連字，其用與「而」字相似。(二) 言字又作乃解。(三) 言字有時亦作代名之「之」字。(『古史辨』三册下編・五七四〜五七五頁)

(10) 我們若用歷史進化的眼光來看中國詩的變遷，方便可看出自《三百篇》到現在，詩的進化沒有一回不是跟着詩體的進化來的。《三百篇》中雖然也有幾篇組織很好的詩如「氓之蚩蚩」「七月流火」之類，又有幾篇很妙的長短句，如

「坎坎伐檀兮」「園有桃」之類。但是《三百篇》究竟還不曾完全脫去「風謠體」的簡單組織。直到南方的騷賦文學發生，方才有偉大的長篇韻文。這是一次解放。但是騷賦體有兮些等字煞尾，停頓太多又太長，太不自然了。做漢以後的五七言古詩刪除沒有意思的煞尾字，變成貫串篇章，便更自然了。（中略）這是二次解放。五七言成為正宗詩體以後，最大的解放莫如從詩變為詞。五七言詩是不合語言之自然的，因為我們說話決不能句句是五字或七字。詩變為詞，只是從整齊句法變為比較自然的參差句法。（中略）這是三次解放。（『文集』二 一三七頁）

- (11) 《詩經》的研究，雖說是進步的，但是都不徹底，大半是推翻這部，附會那部；推翻那部，附會這部。我看對於《詩經》的研究想要徹底的改革，恐怕還在我們呢！我們應該拿起我們的新的眼光，好的方法，多的材料，去大膽地細心地研究；我們相信我們研究的效果比前人又可圓滿一點了。這是我們應取的態度，也是我們應盡的責任。（『文集』十二 一三〇—一四頁）

- (12) 總而言之，你要懂得《詩經》的文字和文法，必須要用歸納比較的方法。你要懂得三百篇中每一首的題旨，必須撇開一切毛傳、鄭箋、朱注等等，自己去細細涵詠原文。但你必須多備一些參考比較的材料；你必須多研究民俗學，社會學，文學，史學。你的比較材料越多，你就會覺得《詩經》越有趣味了。（『文集』十二 一九頁）

參考文獻

- 顧頡剛編『古史辨』三 上海古籍出版・一九八二
 夏傳才『詩經研究史概要』萬卷樓圖書・一九九三
 顧頡剛著・平岡武夫訳『ある歴史家の生い立ち』岩波書店・一九八七

中島みどり『中国神話』平凡社（東洋文庫）・一九八九

胡義成「胡適与詩経」（江西師院学報・一九八二年一期）

「郭沫若与詩経」（西南師院学報・一九八一年二期）

「魯迅与詩経」（復印報刊資料「中国古代・近代文学研究」一九八一年十九期）

張啓成『詩経』研究概況」（復印報刊資料「中国古代・近代文学研究」一九八五年十五期）

張学波「六十年来之詩学」（『六十年来之詩学』第一冊）台北・正中書局・一九七二

林慶彰「顧頡剛論詩序」（訳：西口智也）『村山吉宏廣教授古希記念中国古典学論集』汲古書院・平成十二年）

小倉芳彦「近代中国の思索者たち十二 顧頡剛―「疑古派」の指導的人物」（月刊しにか一九八七・三）

中島みどり「聞一多と詩経 ―研究におけるその方法的試み」（女子大文学国文編四〇・一九八九）

牧角悦子「聞一多の詩経研究 ―創作と古典をむすぶもの」（二松學舎大学人文論叢六七・二〇〇一）

「想像の鹵車 ―聞一多の詩経研究」（詩経研究二六・二〇〇一）

「中国神話学の夜明け ―近代中国の學術と顧頡剛・聞一多の古代学」（神話と詩第二号・二〇〇三）

鈴木義昭「聞一多論文『詩経』的性欲観」について ―その淵源を尋ねて」（早稲田大学日本語研究教育センター紀要

一五・二〇〇二）

横打理奈「胡適と伝統 ―「白話新詩」の文学史的意義づけを中心に」（神話と詩創刊号・二〇〇二）

「胡適の『詩経』解釈にみる文学観」（東洋大学中国哲学文学科紀要十二・二〇〇四）